月へ向かって歩く

福澤　俊

月へ向かって歩いていた。周囲は砂の山ばかりで、全く遮るものがない。おかげで、夜の冷え込みが厳しくて仕方なかった。既にどれくらい歩いただろうか。宿を立った時にはまだ月が昇りかけた頃だったから、もう既に四分の一日は歩いていた事になる。昼間は日の照りが激しくて歩きづらいので夕方の出発を選択したが、これもまた失敗だったかと思案した。いづれにせよ、苦難はつきものだ、と独り言ちた。

しばらく歩き続けると、先に水辺が見える。まだ海は遠いはずだから、おそらくは間欠的に出来た池か何かだろう。昼夜の寒暖差が激しいので、昼は砂だらけでも、夜は大気中の水分が冷えて水たまりになることもある。冷え込みとは別にのども乾いてきたところなので、まずは水辺に向かう事にした。

たどり着いてみると、家の一軒分くらいの大きさの池のような場所だった。周囲からへこんだ窪地のあるので、もしかしたら、定期的に水が溜まる所なのかもしれない。本来なら地図に印でもつけたい所だが、何しろ月の昇る先を頼りに歩いているだけなので、今自分のいる場所がどこだか、十分な見当がついていない。場所の確認は諦めて、背負ったリュックから濾過器を取り出して、コップに水をすくって入れた。濾過器に砂が残る。水の溜まった水筒から別の再度コップに奇麗になった水を注ぎ、一口飲んでみた。無味無臭の水がのどを潤す。ため息をついて、リュックを枕に寝転んだ。

数多くの星が目に映った。星の偏りを確かめながら、あの星座はあれだ、これだ、あれは確か一等星に相当するか、と思いを巡らせてみた。元来星に興味がなかったので、何度も夜に外を眺めてみても、行き先の目印になる以上の星が覚えられないでいる自分が歯がゆくて仕方なかった。ただ、一度はそう思っても、また歩き出すと忘れてしまうのだ。

星を眺めているうちに、眠り込んでしまった。顔の肌が焼けるように熱くなっているのに気づいて、目を覚ました。陽の昇らないうちに出るつもりだったので、しまった、と急いで荷物をまとめて、動ける準備を整えた。はたと見ると、少し離れた所に、中年男性と幼い少女が水を飲みながら休んでいた。そばには、一頭、砂色の肌をしたらくだがいる。男女は日よけのために全身を薄い布で出来た服を着ている。

「あら、起こしちゃった？」

少女が、若い女の子特有の高い声で話しかけてくる。

「ごめんなさい、起こすつもりはなかったんだけど」

こちらの返答を待つ事なく謝ってくる。

「ああ、別に起こされた訳じゃなくて。ちょうど日が照ってきたから、自然と起きたんだ」

「そう、良かった」

というと、今度は、男性が自分の懐から地図を取り出して、近寄ってくる。

「もしわかればいいので、教えてほしいのですが、この街に向かうには、ここからどちらに向かうのがいいのでしょうか」

男性の持っていた地図を見てみると、それなりに詳細な地図だが、自分たちのいる場所を確認するのには、役に立たなかった。

「実は、僕もよくわからないのです。ただ、僕はこの街から東に歩き続けてきたので、首都にい

くには、このまま東に向かうのがいいと思いますね」
　そう言いながら、地図の中の一カ所をさして説明した。要するに、同じ方向だという事だ。
「ああ、なるほど」
「同じ方向なんだね。どちらまでいくんですか？」
　男性の代わりに、少女が話しかけてくる。
「まずは、海に出るまでを」
「じゃあ、途中まで一緒に行きましょうよ」
　少女が少し嬉しそうな顔で提案してくる。砂漠を旅するには、良くある話だ。いつまでも同じ同行者だと、飽きがくるので、道連れを作りたいのだ。自分にも覚えがあるので、悪い提案じゃない事は分かっていた。ただ、砂漠強盗の可能性もあるので、荷物は触らせないのがルールだ。
「ええ、いいですよ」
　少女が水を飲んでから、三人は出発した。少女をラクダに乗せ、男二人が脇に付き、しばらくは無言のまま歩き続けた。
　日も天頂にさしかかる頃、少女が話しかけてきた。
「ねえ、あなたは、どこに行くの？」
「月に」
「月？」
「ええ、弟が住んでいるので、そこを訪ねにいくんです」
「ふうん」
　少女がこともなげに応答した。そして、こちらが返事を返さないうちに、自分で話し始めた。
「あたしはね、売られに行くの」
　唐突な発言にギョッとしたが、少女は大したことがない様子で笑っている。中年男性も、表情を変えず、顔をこちらに向けもしない。
　「売られる」といっても、この辺りでは、最底辺の売春から良家の女中まで様々な職業に売られるので、必ずしも不幸だとは限らない。また、親の経済状況が変われば、取り戻す事も可能だ。ただ、身近な人物にそうした経験のある人に会った事がなかったので、急に言われてまごついた。
「んとね、これから行くのは、大きな商売をしてるウチなんだって。確か、貿易関係だったはず」
「ええ、手広く募集している所があってね。残念だが、しばらく娘を手放す事にしたんですよ。既にこいつの母親もいなくて」
　父親、と思しき男性が応答した。
「ああ、そうですか」
　努めて平静を装いつつ返事をした。その後も、少女は自分の身の上話を続けた。
「お母さんもそうだけど、少し前に働いていた弟も死んじゃってね、だから、私が出ないといけないんだよね。でも、結構評判のいい所だから、ちょっとは楽しいかな、と思って。今まで住んでいた所って、結構山奥だから、楽しいものが何もなくて、つまんなかったんだよ。だから」

　返事を聞かないままに話を続ける。砂漠でこんなに話しては喉を痛めるんじゃないかと心配にもなったが、楽しそう笑顔で話し続ける少女を止める気にはなれなかった。その後も、先に売られていった友達やら、亡くなった母親やら、住んでいた地域の風土やら、いろいろな話を聞いていて、しばらくは退屈しなかった。ふと、馬を引いていた父親が歩みを止め、ラクダを停止させる。何か危険を察知したようだ。用意が良いもので、少女は自分たちの荷物から、大きな弧を描く刀を取り出し、そっと父親に差し出す。父親は振り返る事もなく刀を受け取り、そっと背に隠す。強盗なのだろうか。そのまま息を潜めていると、父親はやおら刀を地中に突き刺した。切っ先には、大人の掌ほどのサソリが刺さっていた。
「危ない所でしたね。下手に進むと、刺されかねなかった。辺りを見てみたのですが、群れをなしてはいないようですね」
　確かに、危険だったかもしれない。この辺りのサソリは群れをなして旅人を襲う事もある。過去に、荷物が手つかずにままに残された、骨になった死体もみた。父親はふうと息をつくと、再度一行は出発した。日も暮れてきたので、一度その場で夜を明かす事になった。その夜は、地図を見ながら道中をどう動くかを相談して、あと五日ほどで目的地までつきそうだということになった。
　そこから更に三日ほど進んだ。
　ある所で、またしても父親が急に立ち止まった。少女から刀を受け取って、背に隠す。遠くを眺めると、ラクダに乗った複数の男たちが徐々に近づいてくる。男たちは一行を見つけると、ラクダの速度を上げて、周囲を取り囲んだ。全員で五人ほどいる。荒々しい様子から盗賊と思われる。
「よし、止まれ」
　男たちの頭目らしい、派手なターバンをつけた男が叫ぶ。獲物でも見つけたように、機嫌の良さそうな顔つきでこちらを眺める。腕を振って、部下に合図を出すと、四人はラクダを降りて近づいてきた。すると一閃、父親が刀を水平に一振り、四人が等しく斬りつけられた。それと同時に少女は荷物から鉄製の皿を取り出し、頭目に投げつける。ひるんだと見るや、自身もラクダ降りて、頭目のラクダの足をめがけていつの間にか持っていた棒を振り回す。棒が足に当たって苦しんだラクダは悲鳴を上げて頭目を振り落とし、慌てた頭目はそのまま父親に首元を斬りつけられた。残りの四人も腹から血を流している所を、少女から棒で頭を強く打たれた。一人が腹を押さえながら飛びかかってきたが、それを受け流して、頭を蹴り飛ばす。あっという間の出来事だったが、勝負はこちらの完勝に終わった。頭目は絶命し、残りの四人もノビているか、うめき声を上げている。
「危ない所でしたね」
　父親はこちらを振り返って言う。
「助かりました。しかし、それにしてもいとも簡単に退治してしまうなんて、素晴らしい」
「ざっとこんなものです。若い女の子がいると狙われやすくてね。もう慣れましたよ」
　そう言いつつ、三人で盗賊らしき集団から荷物を巻き上げた。水の入った水筒と、薫製になった獣の肉を取り上出して、布でくるんでリュックの中に放り込み、再度ラクダに乗って歩き出

した。これからこの盗賊たちはどうなるかと思ったが、二人が容赦なく荷物を巻き上げるので、それに従った。
「ああいう奴らには、情けをかけたら負けですよ」
　父親は笑いながら話した。人を殺めたというより、畑仕事でも終えたような笑顔だった。適当に相づちを打ち、父親の話に耳を傾ける。何でもここに来るまでに三度ほど襲撃を受けて、ひやりとした場面もあったが、少女の機転が利いたおかげで今まで傷を負う事なくやってきたのだそうだ。実際の刀さばきや、攻めや受けを見極めるタイミングなどが慣れている感じもしたが、本人は誇る訳でもない、ただ、旅の出発時に数日間稽古を積んで、娘を守る事に集中したのだとか。なかなか見上げた父親だと感心した。そうしているうちに夜になり、雲一つない砂漠で体を休める事にした。盗賊たちから奪った肉を焼き、つかの間の宴会を楽しんだ。ひとしきり食べて飲んだ後、月の動きを確認しながら、今後の方向を定める事にした。目的地までは、あと十日もすればつくだろう。そこで別れて、彼らは少女の勤め先に行く。そこまで確認して、一眠りした。
　そして、五日が過ぎた。夜ごと空を見上げながら距離と方向を修正し、朝早めに出発、陽の照る時間帯は体を休めながら歩みを進めていった。もうそろそろ目的地という頃になると、緑もわずかだが増え始めた。
　だんだん安心を感じ始めた、ある夜だった。横になってみたものの、ここ数日の疲れもあり、その日はなかなか寝付けなかった。父親と少女は寝たものと思っていた。ところが、そばに人の気配がして、少女が顔を近づけてきた。
「ねえ、起きてる？」
　と寝ている顔に細い指を添えてくる。突然のことで驚いて起き上がると、そのまま飛びつくように腕を首に回してくる。
「どう？」
　少女は甘えた声を発した。何を言いたいかは察したが、あまりのことで言葉もでない。その間にも、体をなで続ける。とっさに出てきたのが、
「お金はないよ」
「あはは、そんなこと気にしてるんだ」
　更に媚びるような目付きで首に絡み付いてくる。慣れた媚態に軽く見られた気がして不愉快になり、少女を振りほどいて無言のまま横になる。目をつぶって、眠る事に集中した。少女が離れる足音が聞こえた。
　しばらくして眠ったようだったが、顔に熱を感じて目が覚めた。ここしばらくは父娘と一緒に起きていて、陽が昇るまでには出発していたので、あれ、と思い飛び起きた。自分のものも含めて荷物が全て無くなり、二人も消えていた。事態を理解するのに間があったが、要するに置き去りにされてしまったのだ。辺りを見回しても二人の姿は見えるはずもない。余りの事で呆然としてしまった。
　恐らく、あの二人は当初から盗人の類いだったのだろう。彼らの話していた事がどこまで真実かはわからないが、おそらくは、最初から地図を持っていた旅人を捕まえて、利用する算段だったのだ。昨夜に少女が誘いをかけてきたのも、男が惚けている所を逃げ出すためだだろう。殺さ

れなかっただけましと思うかもしれないが、道しるべ一つない砂漠で一人取り残されては、死んだも同然だ。地図や、目印をまとめたメモも同じく持ち去られている。食料も、もちろん飲み水もない。あるのは薄い服だけだ。虫に狙われたら、攻撃するものもない。途方に暮れていたが、とにかく太陽の向きから東西南北を確認し、少しづつ歩き出した。
　しかし、どう動いていいかも分からない。体力温存のために動かない方が良いかと思ったが、一方で自暴自棄な心情が勝り、とにかく太陽から東になる方向を見定め、歩き続けた。疑う事のない無一文であるなら、盗賊に襲われても何も取られるものがない。もし襲いかかってきても、彼らは唖然とするだけだろう、いい気味だ。そんな益体もない事を考えながら、陽が照るのも構わず歩き続けた。どうせ死ぬなら、体力が無くなって気を失っている時が良い。そんな考えも浮かんだ。絶望と、自嘲と、微かな希望が綯い交ぜになって頭を駆け巡りながら、歩き続けた。
　夜になって、特にきっかけもないまま、適当なところで横になった。月や星を眺めながら、自分のうかつさを思い出してははらわたが煮えくり返った。そして、そんな事をしている自分に更に腹が立った。とりあえずは、陽が昇る前に起き上がって再度出発しようと決めた。
　そんな日を何度過ごしただろう、徐々に空腹が気になり始め、喉も疲れてきた。足や手にもしびれのようなものを感じ、恒常的に視界がふらつくようになった。歩き続けられる時間も減ってきた。ふうと息をついて太陽の照りつける中、横になり、目をつぶった。体力の減った影響からか、頭痛すらし始めた。
「おい、おい」
　不意に、声が聞こえた。目を開けると、ラクダに乗った、口ひげの生えた男性がこちらを見下ろしていた。
「あ、あ」
　とっさの事で、わめくとも呼びかけるともつかない声が出た。
「おお、生きていたか。起きれるか？」
　男性は嬉しそうに声をかけてくる。男性がラクダから下りて、手を伸ばしてくる。その伸ばした手をつかんで、なんとか立ち上がった。
「どうした、こんなところで」
「どうも、道中置き去りにあってしまって」
「それは難儀だな。どこかにいく途中だったのか？」
「そうなんですよ。ここは、どの辺りになるんでしょう？」
　男性は地図を広げて大まかな場所を教えてくれた。本来いく方向からすると、大分南にずれたようだ。ただ、男性の目的地でもある一番近い都市は、ここから二日ほどで到着しそうだ。その都市からは川が北に向かって流れ、そこから船かなにかで目的地に行けそうなルートだった。そこで、同行できないか、尋ねてみた。
「そうだな、ラクダと一緒に歩くだけだけどな。まあ、疲れたろう、水くらいはだしてやるよ」
「助かります」
　深々と頭を下げて礼を言った。この砂漠で行き倒れている人を見かけた時の行動は、二種類ある。目に入らなかったように無視をするか、息絶えている事を確認して荷物をもらうか、だ。

面倒に巻き込まれないようにするのが適切な行動指針だ。この男性がそのどちらも選択しないでくれたおかげで、助かった。皮肉な事に、全く荷物を持ってない事が、自分が盗賊でない事を明かしているようなものだった。一口の水をもらって、ゆっくりと歩き始めた。疲れが取れないので、途中何度か立ち止まったりしながら、徐々に歩みを進めた。歩きながら、適当に身の上話にふけった。
「そうか、弟さんに、か」
「ええ」
　男性は、川で魚を集めてはあぶったり塩漬けにしたりして売りにいく行商だと名乗った。今は、一度売りにいって帰ってくる途中だと言う。なので、荷物の大半は空っぽで、盗むものも何もないと笑う。同行者も無一文の状態なので、どっちみち盗賊が来ても、去っていくだけだろう。そんな話を楽しげに話し続けた。彼が陽気な性格なので、荷物を盗られたことを一時的に忘れる事ができて、気持ちがとても楽になった。
　それから、予定通り二日ほど歩き続け、ついに石を積んで壁を築いた家がちらほら見えてきた。
「ああ、やっとついた」
　思えば、既に二十日ばかり街というものを見ていない。行き交うラクダも少しずつ増え始め、ようやく助かったという気持ちで一杯になった。行商とは、入り口で別れた。
「じゃあ、俺は、この辺で。また会えたら、酒の一杯でもやろうか」
「本当に助かりました。また、会える日を楽しみにしています」
　そう言って、何度も頭を下げながら、彼を見送った。彼はラクダに乗って、街の外周に沿って進んでいった。
　街の入り口には、小さな石碑に街の名前が刻んであり、ここから行政の管轄だというのがわかるようになっている。道はラクダが五頭ほど並んでも通れるくらい広い。道の真ん中を街の中心へ向かって進んでいくと、左右に野菜や肉、魚を売っている店舗が見える。
　ただ、無一文の状態では、何も出来ない。街にきた事で気持ちは落ち着いたけど、前途が多難である事は変わりない。さてどうしたものかと思案しながら歩いていると、ひとつの看板が目についた。食堂をやっているようで、魚や肉のメニューが表に出ている。周囲の家に比べて二倍弱の大きさをしており、結構繁盛していそうだ。中に入って、店員らしき人を探した。
「ここのご主人は、どなたですか？」
　店員は奥で調理をしている白髪の老人を指差した。店員に礼を言って奥へと進む。
「ご主人ですか？」
　火を焚いて魚をあぶっていた老人はこちらを向いた。
「何か御用ですか？」
　老人に、旅の途中である事、荷物を盗賊に盗られた事、そのために無一文になってしまい、打開策を探している事、ついては、ここでしばらく働かせてもらえないかという事を手短に話した。老人はしばらく黙って思案していたが、こう口を開いた。
「一名くらいなら、いいでしょう。こっちもギリギリで動かしていた所なので。働いてくれる人

には、賄いを一日二食出すが通例だけど、あなたには一食で、その分毎日銀貨一枚でどうですかね？　寝る所は、裏のラクダ小屋とかになるけど、日除けのないところよりマシでしょう」
　主人の気前の良い答えに、喜んで礼を言った。とりあえずは接客業なので、風呂や水浴びの利用の許可も出してもらった。早速服を借りて、店に出る事になった。
　この店では、肉や魚をあぶったり炒めたりして出しているとの事だ。朝は陽が出てからすぐに動き出し、昼前の掻き入れ時には席が埋まってしまう。砂漠の街の通例で、午後の暑い時間帯は店を閉じる。その間、夕食時に向けて準備を進める。夕方には再度席が埋まり、夜半にかけて酒宴で盛り上がる。そんな一日がこの店の流れだった。やる事はたくさんあり、肉や魚の準備から火の扱い、接客、洗い物などなどである。食料は街中の市場まで会に出かけ、洗い物は裏にある水場で行う。お店は主人と奥方、そして交代で入る二名の常駐の店員がいるきりだった。
　既に夕方になっていたので、街についてからすぐ店に出るのはつらい仕事だったが、一日でも多く金銭を稼がないといけない身を考えると、頭の中を空にしてでも働かなければいけなかった。何度かのミスの後、どうにか慣れてきたが、それでも体力の限界すれすれまで働くのは難作業だった。ようやく最後の客も帰り、閉店になった。全て片付けた後、薄暗いランプの中で、主人の用意してくれた食事を食べた。野菜のスープと、炙ってスパイスで味つけした鶏をもらった。久々のまともな食事だったので、興奮状態で周囲と口を聞く事もなくさっさと胃に入れた。
「明日の朝は、食材を取りにいってもらうからな」
　主人からそう言付かると、就寝のためにラクダ小屋に潜んで、身を横たえた。時々ラクダの鳴く声が響くが、わらでこしらえた寝床は、今までの砂地に比べると何倍も居心地の良い場所だった。空を見上げる事もなく、気を失うように眠った。
　明くる朝、奥さんが起こしにきて、軽く水浴びをしてから、市場へと向かった。市場では、卸売りの業者が所狭しと野菜や果物、鶏や豚、牛、馬、ヤギの肉を並べたり、大きな樽に入ったヤギのミルクを売ったりしていた。買い付けは主人が行うので、それを受け取って、持ってきた籠に放り込む。たちまち籠は満杯になり、あふれんばかりに野菜が積まれたが、それでも主人は買い付けを続ける。なんとか籠に乗せて、こぼさないようバランスを取るのに難儀した。何度かの買物の後、主人はようやく帰ると言いだした。
「初めての人には重たいかもしれんが、今日はまだ少ない方だ」
　そう言いながら、呵々大笑する。明日は籠を二つ持っていくという。初めての経験でどれくらいの荷物か想像が働かないが、それでも覚悟を決めた。店に着くと、火の準備をしていた奥さんがおかえりと声をかけてくる。主人は籠の中から野菜と鶏肉を取り出し、ナイフであらかた切り出して、火にかかった鍋に放り込む。既に沸騰している鍋で、野菜がぷかぷかと浮かんでいる。今度は秘伝と言っていた調味料を何度か味見しながら振りかけた。よし、と頷いて、
「しばらく、これを見ていてくれ。焦がさないようにな。時々これでかき混ぜて欲しい」
　と大きな木のしゃもじを投げてきて、自身は店の奥へと消えた。それを受け取って鍋の前に立つ。砂漠に近い街で浴びる火はまた格別熱かった。言われた通りに何度かかき混ぜているうちに、水が減ってきた。どうしたものかと思ったが、そばにいた奥さんに聞いてみると、とりあえずそのままで良いという事だった。しばらくして主人が帰ってきた。今度はフルーツを手にし

ている。それをまたナイフで一口サイズに切る。一通り終えた所で、主人は鍋の様子を見に来た。
「まあ、これでいいか。じゃあ、その鍋をこっちに持ってきてくれ」
　言われた通りに鍋を持ち上げ、床に置いた。主人は皿に中の肉と野菜を少し取り出し、ナイフで慎重に切りながら一口ずつ食べてみる。主人がその皿をこちらに差し出すので、同じように食べてみた。塩や香料のしみ込んだ辛めの味に、舌がしびれた。
「ははは、ここで一番出る料理だ。旨いだろう？」
　得意げに話す主人につられて微笑んだ。確かにおいしく、熱さで体がやられているところなら、良い発奮になる。主人は鍋をそのままに豚の薄焼きに移る。籠の中から豚肉の塊を取り出し、ナイフで一人前分を切り出し、赤や青の、見たことのない調味料で味付けする。鍋を温めていた火を油を塗った棒につけ、それで豚の表面を炙る。スパイスの焼ける匂いが漂いだす。ある程度火の通った所で、火を片付け、すりつぶした野菜のペーストを塗り付ける。均等に塗り終わると、今度は米の調理に取りかかった。そんな風に料理の準備をしばらく続けると、大分陽も昇ってきた。ホールで主人と奥さんが机と椅子を並べ始めたので、それを見よう見まねで作業し、看板を表に出し、来客の準備を整えた。それと同時に常駐の店員もやってきて、一緒にホールに並んだ。
「さあ、今日も暑いからな。倒れないように頑張ってくれよ」
「ええ、頑張ります」
　軽く体を動かしたおかげで、体がほぐれて、気分も良くなった。少し経つと数名ずつ客が入ってきた。それを適当にさばきながら客が減るのを今かと待っていたが、いっこうに減る気配がなく、太陽が天頂を過ぎる頃には、初めての勤務で疲れも感じ始めてきた。昼食を終えた客があらかた帰った所で店を閉じ、食事の時間になった。主人とは夕飯を除く話を事前にしているので、ここでは食事にありつく。米に香味ペーストをかけていっきに掻き込む。
「そんなに腹が減っていたのか」
「初めてで緊張してしまって」
　店員とありふれた会話を交わす。この辺りの人たちは総じておしゃべりが好きだ。一人で食事をしていても、左右からどんどん話しかけてくる。だから、食事の時間は自然と長くなるし、退屈しない。昼に知り合った人とそのまま夕方に待ち合わせて酒を飲みかわすなんて普通に聞く話だ。そして、一通り食べ終わると、休憩に入る。まずは、店の影で一眠りする事にした。一晩寝たとはいえ、疲れが全て取れた訳ではない。目をつぶると、あっという間に眠りについた。
　ふと、夢を見た。砂漠の真ん中にたっている。何か忘れ物をしたような気がする。緑色の影がこちらを向いて何か話しかけてくる。ああ、そうだ、と肯定的な返事をしたが、その影はまだ焦ったように話を続ける。どうしたんだろうかと思って歩き出すと、中年の女性が挨拶をしてきた。ぎゅっと足を引っ張られた感覚があり、前に進めない。
　そんなところで主人に揺すぶられて起きた。これから午後の支度だと言う。今度は酒が多く出るので、樽やコップの整理と、おつまみになる鶏肉や揚げ物の準備をする。小麦粉を水と卵で溶いて鉄板に敷き、固まった所で刻んだ肉と野菜を並べて閉じる料理が一番出るそうだ。そのほ

かも、空洞のあるパンに香辛料と一緒に野菜クズを詰め込んで気軽に食べられるようにしたり、魚を油で揚げて塩で改めて炙ったり、とにかく酒のつまみに良さそうなものばかりだ。あとは、果物のオードブルなんかも用意する。切って焼いて混ぜて振りかけて、そんな準備に追われた。
　陽が下がって過ごしやすい時間帯になると、徐々に客が入ってきた。まず第一声で酒を注文され、それからおつまみの追加が入る。単発の注文で済んでしまう昼と違って、注文の細かいことが多い。店にいる四人が総出でなんとか捌くが、不慣れなために他の人の世話になってしまう事が多く、気が滅入る。と思いきや、滅入っている暇もなくにまた注文が入ってくる。そんな忙しさの中で、一日が終わった。
「はい、ご苦労さん」
　席でゆっくりしていると、奥さんが水を出してくるので、一杯もらって一息つく。
「よく頑張ったじゃない」
「何とかなりましたね。体力には自身があるつもりだったんですが、途中からへとへとで。これ以上働いたら、ぶっ倒れる所でした」
「初日にしては、よくやったわ。明日も、同じように働いて頂戴ね」
　頑張ります、と答えて、裏手の水場に向かった。汗をかいている訳ではないものの、長旅の異臭はまだ取れていない。夜も更け、空気が涼しくなってから、水を何度か浴びた。この街には、川に沿っているおかげで水には大きく不自由しない。話によれば数年に一度の割合で干上がる事もあるそうだが、今年は大丈夫だそうだ。布で全身を拭きながら、水を体に浴びせ続けた。一通り終わると、挨拶もそこそこにラクダ小屋に引っ込み、髪も乾く前に眠りについた。
　そんな労働が二十日続いた。十日に一度ほど休みをもらって、街を散策する。労働対価の銀貨は主人に預けてあるので、特に手持ちの金もない。ぶらぶらと店を覗いては、品物の値段を確認するだけだ。今後のことを考えると、リュックに地図に水筒、その他様々なものが入り用だったが、路銀を考慮すると、そんなに買い込む訳にはいかない。品の値段を睨んでは、加減乗除に耽る。街には川に沿って大きな船着き場があり、そこから常時三、四艘ほどの船が出入りしている。北に向かうものと南に向かうものが交互に並び、客を乗せては出向する。目的地となる街までは、船で一昼夜かかるようだった。交通費もそれなりにかかる。余裕を持って旅に臨むには、あと三十日ほど働かなければいけないようだ。
　そんなある日、いつも通り店に出ると、主人の姿が見えず、奥さんが厨房で作業をしている。どうしたのかというと、主人が具合が悪く、薬を飲んで寝ているのだそうだ。買い出しはどうするのかと聞くと、自分に行ってきてほしいとの事。しばらく付き合っていた事もあって、大体の準備は覚えている。奥さんから金をもらい、市場へと向かった。
　この時に、持ち逃げしようと思わなかったと言えば、嘘だ。手には金貨十数枚、主人に預けてある金を十分に上回る。これだけあれば、旅は目的を達せられるだろう。でも、思いとどまった。ここで面倒なことをして逃げ出せば、常に背中を意識する生活になる。官憲のだらしなさを勘定に入れても、捕まる可能性はないとは言えない。そんな気苦労を背負い込むくらいなら、今はまじめに働く方が無難だ。いくら手ぶらに近い旅とはいえ、別に荷物を背負い込む必要もあるまい。

　そんなことを頭に巡らせながら、買物を済ませていった。一人で注文と荷物持ちを兼ねるのは結構面倒だったが、なんとか肉と魚、塩やこしょうなどの調味料の類いを買いそろえた。
　その日は、人手が足りないにも関わらず、いつもより客が入り、終わる頃にはへとへとになってしまった。手慣れているとは言え、普段二人で行っている調理を奥さん一人でこなさなければならず、ここでの躓きが客を待たせることになった。うるさい客は注文が遅いと怒鳴りだすし、一度火がつくと、周囲に連鎖する。事情を話してはなだめるのはとても骨が折れた。それでも、いつもより幾分多い売り上げは、奥さんを満足させた。
　そして、更に三十日が過ぎた。主人に暇を申し出ると、改まって話を切り返してきた。
「なあ、良かったら、もうしばらくここで働いていかないか。すぐに立つこともないだろう。人手も足りないし、こっちも体がガタが来始めてな。もし希望があれば、店の後継者候補にしてもいいと思っているんだ」
　主人は名残惜しそうな顔をしていた。
「見込んでくれるのは嬉しいのですが、やはり、旅立たない訳にはいかないので」
　しばらく思案したが、そうか、と言うと、主人は立ち上がって、既に預けてある金を取りに奥へと入っていった。しばらくすると、突然主人が叫びだした。
「ない! ない! しまっておいた金がない!」
　突然のことで慌てて駆け寄ると、手元にじゃらじゃらと音のする袋がある。
「ははは、冗談だよ。ここに銀貨五十枚分を入れてある。多少多めに入れておいたので、大事に使いな」
「もう、ビックリさせないでくださいよ」
　あまり冗談を言われると、別れるのが惜しくなる。感傷的にならないうちに、旅立つことにした。どうせ荷物もないので、袋をもらっては、礼を言って、店をさっさと出て行った。主人と奥さんが手を振ってくれる。
　そのまま市場に出て、リュック、財布、地図、メモを取る紙、日差し除けの衣服、その他を買いそろえた。なるべく安く済ませたつもりだったが、それでも路銀は心細いまでに減っていった。それから、この街の役所に出向いた。道案内をする役人に旅先への順路と、星や月を使った目印を相談して、メモを取った。星を覚えるのが苦手なので、これが無くなると、また路頭に迷うことになる。そうこうしているうちに、日も大分暮れてきた。船は既に出てしまっているので、その晩は街の宿に泊まることにした。
　なるべく安い宿を見つけ、夕飯も適当な一杯で済ませた。宿の部屋を確保して、気分転換に表に出る。やや曇りがちな空に、星がまたたいて見える。ぼうっと眺めていると、気前の良さそうなじいさんが話しかけてきた。
「よお、兄ちゃん、どうした」
　どうも見覚えがあると思ったら、店の常連の一人だった。
「店はどうした？ まだやっているだろう」
　そう聞かれたので、店を出てきたことを話した。最初は喧嘩でもしたのかと疑われたが、旅の途中であることを話すと、いろいろ突っ込んで聞き返された。ここ人たちの話好きは嫌いではな

いが、一人になりたい時は、ちょっと面倒ではある。そんな暇つぶしに付き合ってから、宿へ戻って、暖かい布団で寝た。久々の、おそらくは数十日ぶりの布団だった。
　朝は早めに出て行った。なるべく早い船に乗りたかったのと、陽が強くなる前に動きたかったからだ。船着き場でしばらく待つと、縦に十人くらいは乗れそうな、屋根付きの船がやってきた。前後にオールを持った船員がおり、それの間に四、五人で乗り込んだ。先頭の船員が笛を吹いて、船を出発させた。船頭がオールをこいで、ゆっくりと動き出す。最初は遅めだったが、徐々に速度を上げていく。この辺りは高低差がなく、流れも緩やかなので、川筋に沿っていけば、オールを動かした分だけ速度が出る。二人の船員は徐々にオールを動かす速度を上げていき、船はそれにつれて川を走り続けた。川沿いには、背の高い草が生い茂っている。砂漠地帯ではあるが、川の周辺はそれなりに緑も豊かである。陽が頭上に近くなる頃に、一度船着き場に到着し、乗客を入れ替えた。再度船が出発する。またゆっくりと速度を上げて船は進むと、夕方頃には、にぎやかな街についた。ここが終点だ。船は客を全て下ろし、片付けられる。ここから、海に出て大陸を離れ、次の目的地へと向かう。
　その前に、ひとつ飯でも食べようと繁華街に向かった。川の船着き場からなだらかな坂を海に向かって降りていく。港町らしい、騒がしい町並みになっていく。心持ち急いで坂を下っていると、途中、人が集まって騒いでいるのに気づいた。
　背伸びをして、騒ぎの中心を覗くと、二人の男女が後ろ手に縛られ、背後に刃物を持ったいかめしい男性が立っているのが見えた。刑の執行だとわかったが、刑を受けようとしているのは、砂漠で出会った強盗の二人だった。どうせまた何かを盗んで捕まったのだろう。父親は首をうなだれて、既に刑を覚悟しているようだった。少女は泣きながら、「助けて! 助けて!」と泣き叫んでいる。麗しい少女が泣きながら助けを乞う姿は、官能的にも思えたが、砂漠で経験したことを思い出して、却って不快な気持ちになった。煮えくり返る気持ちを押さえ、その場を背に向けて歩き出した。すると、背後でわっと声があがった。刃が下りたのだろう。周囲のどよめきを聞きながら、再び坂を下りていった。
　港のそばには、雑貨店や食堂が建ち並ぶ。食堂のひとつを訪ねて、焼き魚を食べた。さすがに港だけあって、安く、大きな魚を食べることができたので、満足して眠気すら覚えた。うとうとした調子で食堂を出て、券売所に向かう。券売所では、出航する船の行き先と大まかな時間を教えてくれる。希望する船は、明日の朝にでも出るとのことだったので、乗船用の券を一枚購入して、さっさと安宿にこもることにした。
　次の日は旅立ちを祝うような快晴だった。朝早く宿を去ると、早速荷物を携えて船に乗り込んだ。船は十日ほどかけて東へ海を渡って別の大陸へとつながる。このために二階建てをしていて、一階は乗船客用の部屋と、船乗りたちの部屋が詰め込まれており、二階は船長室始め航海に必要な施設で作られていた。船員の一人が鐘を鳴らすと、船は帆を揚げて発進した。
　これからが退屈との勝負だった。しばらく進むと周囲は真っ青な海以外何も見えなくなる。食事は朝と日が暮れる頃に料理人が用意してくれるが、それ以外に何か暇つぶしになるものもない。仕方がないので、部屋に閉じこもって寝ることにした。部屋の中は薄暗く、窓もない。船員たちの中で暇をしているものは、別の部屋でトランプで遊んでいるようで、時折威勢のいいかけ声

が聞こえる。乗船客は他に五名おり、男性が三名と、子をつれた母親がいた。母親と子供は薄汚れた服を着ており、明らかに貧乏していた。そんな様子を眺めながら外を眺めていると、揺れが心地よく体に響いた。晴天の海はどこまでも青く、旅の今後を明るいものに思わせてくれた。
　しばらくすると、がっしりした体格の船員が入ってきて、
「おい、飯だぞ」
　と呼びかけてきた。
「上で食事を用意してるぞ」
　ありがとうと礼を言って二階の食堂室へとあがっていった。外は日が後方に沈みかけたところだった。狭い食堂室ではクリームの塗った固いパンが野菜を漉したジュースと一緒に机に並べられていた。既に他の乗客で席は埋まっており、そのうちの一角に陣取り、配られたパンをかじり始めた。予定は十日とはいえ、船旅なのでいつ予定が狂うか分からない。なので、どうしても保存の利くパンや干し魚、塩漬けした野菜といった食事が続いてしまう。この先を考えるとうんざりしたが、それでも食べない訳にはいかないので、無理をしてジュースと一緒に飲み込んだ。向かいには、例の母親がパンをジュースに浸して子供に食べさせている。子供は、明らかに嫌がっているようだった。
「お腹すいたって言っていたじゃない」
　と母親が差し出すが、子供は少し食べては押し黙った。母親は困った顔をしていた。
「まだ日もありますし、しばらくとっておいてはどうですか？」
　と話に割り込んでみた。母親は一瞬きょとんとした顔をしたが、すぐに笑顔になり、
「まあ、そうですね。口に合わないみたいだし」
　彼女もご多分に漏れずおしゃべり好きで、いろいろと話してくれた。元はそれなりに裕福な商家の男性と結婚し、一児をもうけたが、出産直後に夫が亡くなり、商売も徐々に傾き始めた。それでも数年間頑張ってみたが、結局は店を畳み、これから自分の出身地まで帰る所なのだそうだ。ここしばらくは家財道具を売り払って節約を続けたため貧乏ななりだが、有力な役人の家の出であるため、帰郷したら落ち着くという。それなら結構ですね、と返事をした。子供はその間固くて味の弱いパンを面倒くさそうにかじり続けた。
「ねえ、ママ、リンゴのジャムが欲しい」
「ごめんね、今は無理なの」
　子供は拗ねた態度で押し黙っていた。貧乏な船旅に慣れていないのだろう。パンをおいて、野菜を絞ったジュースを飲んだが、これもマズそうな顔をした。そんな子供を脇に世間話を続けていると、楽器を持った三名の船員たちが現れた。ギター、アコーディオン、シンバルという組み合わせだ。ギターの持ち主が話始めた。
「さて、お集りの皆さん、本日は、乗船真にありがとうございます。今宵は、それを祝い、船の旅の順調なることを祈願して、音楽を奏でたいと思います。お耳汚しではありますが、是非ともお付き合いいただければ。それでは、始めます」
　とギターをかき鳴らすと、それに合わせてシンバルがグワンと鳴った。ギターを弾きながら異国の言葉で歌を歌い始めると、同じメロディをアコーディオンが奏でた。なかなか決まった演

奏で、周囲もなかなか楽しそうだった。一度音楽を止めると、シンバル役が子供を引っ張りだして、シンバルを渡した。
「よし、一度やってみよう」
　子供はおそるおそる、くわん、と鳴らしてみると、嬉しそうな顔をした。
「いいかい、おじさんが合図したら、叩いてみるんだよ」
　そう言うと、ギターに目配せして、最初に演奏した曲を、今度は速度を落として演奏し始めた。シンバルが音楽に合わせて合図をすると、子供は嬉しそうにシンバルを叩いた。テンポは何度もずれていたが、それでも子供は楽しそうにシンバルを演奏した。一通り曲が終わると、全員が拍手を送った。子供は満足そうな顔で帰ってきた。
「良かったな、良い演奏だったぞ」
　子供の頭をなでてやると、はにかんだ顔をした。子供は残りのジュースを、今度は満足げに飲み干した。
　数曲演奏して楽隊が下がると、食堂に来ていた乗客は三々五々自分の部屋に帰っていった。
　最初の一日は珍しい経験で船も楽しかったが、三日もすると飽きてくる。天候は順調で、船が航路を間違えたという話もない。それはそれでつつがない旅路ではあったが、退屈だけはまた別だ。どうしたものかと甲板に出ると、強い風が吹き付けてきた。辺りは一面の海で、波も穏やかだ。甲板には船員が仕事がてらたむろしていて、マストの上の方には、見張りが一人ついている。船員に話しかけてみると、彼らも退屈は一緒だったが、さすがに慣れている様子だった。陸路に比べると、賊に遭う可能性が少なく、むしろ緊張感を欠くと言った。
　それから更に三日経つと、今度は雨が降ってきた。雨は最初は甲板を湿らす程度だったが、徐々に強まってきて、風とともに横に吹き付けてきた。船員の動きが慌ただしく、幾分心配になったが、そこは専門家に任せるしかないと思い、何も行動しないでいた。すると、近くで乗客の子供の息が激しくなってきているのが聞こえた。急激に気温が変化したために体調を崩したらしい。船員の一人が飲み水と粉末の薬らしきものを持ってくる。母親は険しい顔をして子供の汗を拭いながら、薬を飲ませた。子供は、薬はどうにか飲んだものの、水は吐き出してしまい、お母さん、お母さんと叫びながら、息をぜいぜいいわせていた。母親は焦ることなく子供に厚めの布団をかけて寝かせたが、子供は、まだ目を閉じて母を呼んでいる。初めての船旅で神経が疲れているのだろう。ただ、病状自体は普通の風邪のように思えた。
　食事の時間になったので、食堂室に行って、相変わらずの食事を食べながら、さっき薬を持ってきた船員に尋ねた。
「子供の様子はどうなんですか？」
「ああ、あれは、特に大したことはない。一晩眠っていれば、何とかなるでしょう。ただ、あのまま回復しないと分からんがな」
「風邪ですかね」
「子供はね、仕方ないよ。ただ、彼にはしばらく近づかない方がいいでしょうね。蔓延させられたらたまらない」
　そうはいったものの、乗客用の部屋は一つしかない。ひとつ親子に相談するつもりで、食事を

済ませると親子の分の食事を部屋まで持っていってやった。母親から感謝されたものの、いつもの固いパンと乾燥肉に、野菜ジュースだ。とりあえず、伝染しないよう、子供を隅に寄せてもらうようお願いした。母親はそれに応じて、子供を部屋の隅に押し込んだ。苦しそうな声をあげたが、直におとなしく眠った。

　それから、二日ほど雨は続き、その間、子供は起きては苦しみ、しばらく寝てはまた起きて苦しい声をあげていた。最初は気丈だった母親も徐々に表情が曇っていき、食事もなかなかしづらそうだった。心配して母親に話しかけてみると、厳しい表情で、なんとかなるといいのですが、と応答するだけだった。

　それから次の日は、久々に抜けるような快晴だった。一方で子供はまだ回復しておらず、顔付きも痩せていった。それにつれて母親も細り、船員も乗客も心配そうだった。幸い、子供以外に体調を崩したものはいなかったが、今後も出ないとは限らない。船員の話では、あと三日で到着の予定だが、万一他に伝染するものが出れば、大事をとって子供を海に捨てることも考えた方が良いということだった。さすがにこのことは母親には話さなかったが、いざそれを想像すると、いくらか胸が痛んだ。

　そして、更に翌日。引き続き朝から晴れていたが、甲板では、母親と船員が押し問答をしていた。例の子供の放棄について、話していたようだった。母親が泣きながら船員の一人に懇願している。

「しかし、これ以上は、危ないんだ。今夜までに子供の病状が回復しないようなら、薬を飲ませた上で、海に投げる。このまま上陸して病気を持ち帰ったら、こちらの問題にもなる」

　無慈悲な船員の宣言で、母親はその場に泣き崩れた。見ていると、こちらも気が塞ぐので、その場を立ち去って、出来るだけ声の届かない所を探して船の反対側に逃げたが、それでも、彼らの問答が聞こえた。出来るだけ海を眺め、聞こえない振りをすることで、その場をやり過ごすことにした。しばらくして、船員らの声が甲板から消えた。代わって母親の嗚咽が聞こえてきた。聞こえない振りをするにはかなりの辛抱が必要だったが、そのうち、母親も消えた。

　その夜は、また雨だった。食事時には、浮かない顔の母親も食堂室に来ていたが、半分ほど手を付けた所で、残りを持って部屋に去った。部屋では、子供を隔離するように荷物で壁を作り、残りの客は出来るだけ離れた所で寝るようにしていた。正直、こんな作りで伝染が防げるのかと半信半疑だったが、幸い誰も発病していない。そもそも、彼が最初から風邪以外の病気を持っていたのではないかと思ったが、医者の素養があるわけではないので、それは口にしなかった。

　翌朝、食堂室で朝食をとっていると、やつれたものの、明るい表情の子供が母親につれられて入ってきた。一同驚いたが、子供は、出されたパンを、今までよりもおいしそうに食べ始めた。

「元気になったんですね」

　そう母親に話しかけると、母親はこれ以上ない笑みで頷いた。

　そうして、少し遅れたものの、翌々日には、船は新たな大陸に着いた。たどり着いた街は小さく、ちょっと歩くと、今度は平たい草原地帯が待っている。街中で新しい食事を買い溜め、馬を借りて街を出ると、遠くに横一列の山脈が見える。まずは山脈に向かう道を見つけ、一直線

に走った。
　それからは、一直線に山に向かう道を、ひたすら走り続けた。幾日も幾日も走り続けたため、途中から日付の感覚も分からなくなった。低い草で覆われた草原はほとんど風景を変えずに広がり続けた。街のようなものが見えた時もあったが、その多くを無視して走った。そして、徐々に木々が増えていき、果てしないと思われた草原が終わる時が見え始めた。
　しばらくは雲のない旅が続いた。夜になれば、山の稜線から月が上り、自分の目指している方向が正しいことが理解できた。夜中は、頭上に迫らんとする大きな月が昇った。まるで手が届きそうで、もう少し近づけば、表面の凹凸さえ見えるようだった。月には、一点の曇りもなかった。ただ輝かしいだけの黄色い光が、自分の到着を祝福してくれるように思えた。真の円を描くその輪郭は、辺りの星を蹴散らして、天を王様のように陣取っていた。
　一度宿を取って馬を換え、更に走り続けた。長い旅もそろそろ終わりだと思うと、急に疲れが体に感じられ始めた。それでも、あと一踏ん張りと、なんとか馬を駆って、草原を走り続けた。草原の様子が変わり始め、徐々に背の高い木々が増え始めた。それは連なって森になり、その先から道の勾配があがり始めた。ゆっくりと角度を増す道に、馬の速度は急激に落ちていった。そろそろ厳しいかと思えた所で馬を離し、荷物を背負って山道に入った。
　もうすぐだな。口にしなくても、そんなことは体が承知していた。気持ちの高揚で、自然と歩く速度は上がっていった。岩肌をむき出しにした道を昇り続け、それでも体は堪えることがなかった。山の麓についた時は朝をやや過ぎた所で、昼過ぎには奥深くまで入り込んでいた。
　山の頂点まで来ると、続いて下りの道に入った。重力に体を預け、つんのめりそうになりながら道を下る。徐々に辺りが暗くなり始める。ホウ、ホウとフクロウの鳴く声も聞こえてきた。鳥の鳴き声を脇に進んでいくと、今度は前方がほのかに明るくなり始めた。その明かりを目指して、やや早足で駆けていく。すると、大きな谷にさしかかった。
　谷からは、巨大な月が姿を見せていた。大きな大きな月は、その明かりで一面を明るく照らし出していた。まるで音すら聞こえそうなほどの偉容だった。月の光に照らされた周囲の岩や木が白く輝いている。思わず嘆息が漏れた。やっとついた。谷は、行き着いた所で切り立った崖になっている。月が、その崖の底からはい出てくる。
　僕は、その崖から、大きく飛び上がって、谷に身を投げた。